# 釋迦堂遺跡発掘報告書

昭和４２年２月２０日

長野県上伊那郡高遠町教育委員会

# もくじ

一　遺跡としての種類、員数および名称 ……1

二　発掘した土地の所在 ……1

三　所有者、住所氏名 ……1

四　当該土地の範囲 ……1

五　発掘届者の氏名または名称、代表者並びに住所 ……1

六　発掘担当者 ……1

七　発掘の目的 ……1

八　発掘経過 ……1

# 埋蔵文化財発掘報告書

## 一．遺跡としての種類、員数および名称

集落遺跡　　竪穴址　3個

縄文式竪穴住居址

## 二．発掘した土地の所在

長野県上伊那郡高遠町大字長藤釈迦堂　1840、1841、1842、1839

## 三．所有者、住所氏名

長野県上伊那郡高遠町大字長藤1840番地

伊　藤　正　男

## 四．当該土地の範囲

長野県上伊那郡高遠町大字長藤字釈迦堂　1840、1841、1842、1839　番地

畑　160平方米

## 五．発掘届者の氏名又は名称、代表者並びに住所

長野県上伊那郡高遠町教育長　　石　川　教　明

## 六．発掘担当者

長野県上伊那郡宮田村　　友　野　良　一

長野県上伊那郡宮田村　　太　田　　保

## 七．発掘の目的

土地改良事業により、釈迦堂遺跡の一部が、水田化するにあたり，緊急発掘を行ない、記録保存をする目的をもって行なうものである。

## 八．発掘の経過

### 1．発掘前の遺跡の現況及び規模

釈迦堂遺跡は藤沢川左岸河成段丘上に分布する遺跡で、その面積は、2.7ヘクタールにわたる、丘陵遺跡である。釈迦堂遺跡として知られたのは、大正十五年鳥居龍蔵博士が、先史及

び原始時代の上伊那に就いての調査で、土器・石器が出土した遺跡として認めたことに始まり、昭和３１年信濃資料調査で、板山釈迦堂遺跡。繊維土器・勝坂式・加曾利Ｅ式・打斧・半磨石斧磨石斧・石錘・土師 前期・後期・須恵前期・灰釉。昭和４０年上伊那郡誌、板山釈迦堂遺跡、勝板・加曾利Ｅとして認められている重要な遺跡である。

２．発掘の動機

昭和４１年度土地改良事業が行なわれるについて、現地の試掘を行なったところ、遺跡らしき個所が発見されたので、県教育委員会に、このむね届出たところ、１２月３日、県教育委員会指導主事林茂樹先生の現地調査となり、その結果、釈迦堂遺跡は極めて重要な遺跡であるから、緊急発掘を行ない記録保存をするようにとの指示を受けたので、高遠町教育委員会は、御指示の線にそって改めて発掘届を提出する運びとなる。

３．発掘着手及び終了の時期

文化財保護委員会の許可を得たので、着手月日を４１年１２月１０日より同月１３日までの４日間と決定。

４．発掘参加者

長野県教育委員会指導主事　林　茂樹　　高遠町長　馬場恒好　　高遠町石川教育長

伊藤係長・地主伊藤正男・町文化財保護委員北原通男・公民館長北原久治・河南小学校教諭長瀬康正・

発掘担当者　　友野良一・太田　保　　調査員　　根津清志・御子柴泰正・河南小学校長福沢伝一・彌生ケ丘高等学校教諭堀口貞幸・長藤小学校長永原武男・補助員北原太蔵・事務局伊藤直次・田中静男・役場伊藤邦司・小松昭三・小松昇・藤沢直平・向山幹男・鎌倉治郎・伊東義人・春日九一・赤羽英一・中村章治・田畑恵康・伊藤文人・高遠高校小野沢重幸教諭・伊藤隆司教諭外生徒１３名・町文化財委員北原巌・星野成一・役場守屋直人・天野達郎・北原侑北原芳美・北原岩登・春日文博・橋爪貞視・伊藤輝男・矢野藤三・田畑・彌生ケ丘高校生１１名・高遠中学校池上正直教諭・中平正明教頭外生徒４９名・赤穂高校教諭北原昌衛・役場伊藤襄・村田森雄・広瀬和夫・北原幸司・田畑友子・田畑恵康・有賀広徒・井東大治郎・伊藤賢一守谷基弘・長藤小学校長□下平広光・酒井幸衛教諭・小池勝雄教諭・北原実史・松下貞子・橋爪みつゑ・西沢百合子・伊藤しず子・中村とみ・西沢忠太郎・森田房吉・矢沢きくえ・竹内いこを。　参加者延数２４８名、見学者２６０名

１２月３日　長野県上伊那郡高遠町大字長藤板山、釈迦堂遺跡緊急発掘現地打合わせを行なう。県教委より林茂樹指導主事を招き指導をうける。この結果、板山釈迦堂遺跡は過去の調査に於いて繊維土器及び縄文中期初頭型式及び中期・後期・並びに須恵、灰釉を含む多量の遺物を出土する遺跡にて、諏訪・伊那との交通上重要なＶａｌｌｅｙ 的な遺跡である関係上、緊急発掘を行ない記録保存をするよう御指示を受ける。

出席者　　県教委林茂樹指導主事の外に、高遠町教育長石川先生・伊藤係長・地主であり教育委員の伊藤正男氏・高遠町文化財保護委員北原通男・長藤公民館長北原久治・河南小学校教諭長瀬康正氏　以上７名。

１２月６日　発掘調査団打合わせ会、午後５時３０分より、伊那市中央区御子柴恭正氏宅に於いて、調査団員友野良一・太田　保・御子柴恭正・根津清志・高遠町教育長石川教明諸氏出席のもとに開催。次の事項について打合わせる。

発掘日程　４１年１２月１０より同年１２月１３日まで４日間。発掘参加者、高遠町役場職員・人夫及び高遠高校職員並びに生徒・赤穂高校・彌生ケ丘高校・高遠町中学校を主体にして発掘を実施する。発掘に要する機械器具及び資材の準備等は高遠町役場教委で。

１２月８日　県教委文化財保護委員長宛、埋蔵文化財発掘調査等の届出書提出、事務局。

１２月９日　（金）晴　　発掘に要する機材及び消耗品並びに一切の材料完備。事務局。

１２月１０日（土）晴

午前９時現地にて発掘式挙行、高遠町教育長石川教明氏の挨拶、つづいて伊藤係長の調査団の紹介、調査図長の発掘に対する主旨及び方法、並びに注意事項等について。

９時３０分発掘開始、先ず附近の地形測量。担当は高遠町役場測量係の手により測量。測量の内容は、地形測量・藤沢川右左岸の関係を表現しその地形を具体的に現わすため、東西の縦断測量及び遺跡地の南北の縦断の２本を設定し、遺跡の立地をより具体的に知り得るため。又発掘個所にB.Mを設置、現地の標高並に区トレンチの高さ及び住居址の表面高と床面高を正確に記録するため設ける。更にこれを基点として縦断を展開した。またこのB.Mは住居址の位置及び各トレンチの配置等実測平面図の基準点ともなる点である。

各トレンチに分担して調査団及び調査員・調査補助員を配置。記録係には高遠町役場職員がこれにあたり、調査に万全をきす。第１号トレンチ、本トレンチは１２月３日予備調査の時、仮に設定したものを今回も引続いて調査することにした。　第２トレンチも同様、第３号トレンチは、分布平面図に示されているとおり、第２トレンチの西に設定した。第４トレンチは、第１号２号トレンチと同様に予備調査の時設けられたものを併用することにした。第５トレンチは、第４号トレンチの北、藤沢川の河成段丘上に平行して、２ｍ～１０ｍを離れて北東の方向に設ける。第６号トレンチは、第１号住居址より１４，５ｍ東方南北に設ける。午後より区トレンチ遂次遺物が発見されるようになり、発掘もようよう活気をおびてくる。

次に各トレンチの発掘状況を述べると、先ず１号トレンチでは、第２地区の東端地表下５５糎より、土師後期糸切底の破片を発見、その附近の同位層から縄文中期加曾利E式土器が検出され、黒色土層の落込も深いので、或は縄文か土師か、いずれかの住居址ではないかと考えられる。

２号トレンチ、２号トレンチの南端に地表下２０　～　２５糎に加曾利E式土器の底部を発見、つづいて南より７ｍの地表下１３糎の個所に、直径６０糎内外に焼けた場所があり、その附近に、径１０糎～２０糎内外の自然石十数個が、聊人工をもって配石したのではないかと思われる状態で出土、さらにその個所より北１２ｍの位置にも加曾利E式の遺物が発見、この層位は極く浅く地表下３０糎内外で砂混り赤土となり、その下からは礫層に変るという地層で、本日のところでは、遺構とは到底考えられない状況である。

３号トレンチ　北NO０．０地点より南８ｍ地表下２０㎝の個所より、加曾利E式土器、１０ｍ地点地表下２５糎に加曾利E式土器、１０ｍ地表下２２糎に加曾利式土器片が発見される。３号トレンチは北寄りは砂混り黄色土層の深さが浅く、南に行く程色土層が遂次深く変化して

いる地形である。3号トレンチは、各トレンチに比較して一番黒色土層が浅く、かつまたローム質層も砂混りの黄色ロームといった土質であり、この層も10糎程で砂礫層に達す。当3号トレンチに於いては、住居址らしきものには突き当ることができなかった。しかし結果的には黒色土層と、砂混りローム質層の変わる10～15糎間に加曾利E式を中心とする遺物が多く出土した。

第4号トレンチ　本トレンチ東端第2地区西№0.0より10m深さ68糎下に加曾利E式土器が、2号トレンチ南端に出土したと同様な状態で発見。21m地表下80糎に達しても、床面らしきものには当らない。

第2地区22.5m以東は、黒色土層の落込が深く凹状を程しているあたりは、或は地形的な現象ではないかとも考えられる。第4トレンチは東西に設定したトレンチであるが、その比高は51糎西に傾斜している地形で、黒色土層は西端で15糎内外、　　西より10米地点23糎，22.5米では80糎の極端に深層位をなしている。遺物は西より10m地附近地表下25糎～30cmの黒色土層の層位に一番多く発見された。土器は加曾利E式が大部分を占勝坂式は僅であった。又20m地表下42糎に勝坂式出土、20～22.5m地表下38糎～44糎に加曾利E式、それより下層58糎附近より多くの加曾利E式土器片が発見された。58糎より80糎の黒色土層よりは遺物は発見できなかった。ローム層まではまた深いらしい。この深い黒色土層の層は第6トレンチあたり迄は続いていると思われる。第4トレンチの土器包含状態は地表下25糎～65糎の層位に分布されている状態で、その土器片は加曾利E式が主体である。

第5トレンチは、第4号トレンチに畧々平行した位置に設定した。本トレンチは集落の北限を知るため設けたものである。巾1.5cm、長さ28m、西より10m毎に区切り、第1地区、20mまで第2地区28mまで第3地区に区別し調査を進めた。第1地区の西端附近は耕土も浅く、第4トレンチと同様20糎内外で砂混りのローム質層に達する。第1地区内では地表下30糎～40糎黒褐色混土層中より加曾利E式土器片が発見される。第3地区25mの第6トレンチとの交叉点地表下51糎の黒色土層中より磨製石斧が、加曾利E式土器片と共に出土、又この附近からは多量の土器片及び他のトレンチで発見されたと同様な集石の一部も見受けるところより、或は住居址ではないかと考えられる個所である。

第6号トレンチ　第6号トレンチは、第1号住居址の東14.5mの地点に南北に設けたトレンチで、南を基点として巾1.5m、長さ48.5mのトレンチである。地区は南より第1・2・3・4の10m毎の4地区に区切り調査上記録し易い様設定した。南基点より北1m地点深15糎地表下黒色層中より加曾利E式土器、2m地点深さ15糎より加曾利E式土器片、4m地点深さ15糎より石斧・加曾利E式土器片、5m地点地表下17糎黒色土層中より加曾利E式土器破片出土。6m地点深さ地表下16糎より加曾利E式及び須恵器片が検出。7m地点深さ18糎加曾利E式土器片深さ20糎より黒曜石片を発見。8m地点深さ16糎より加曾利E式式及び底部を発見。9m地点深さ14糎より黒曜石及び加曾利E式、加曾利B式土器破片出土

第6号トレンチ軸　基点より北第1地区西側8m～10m間にトレンチを拡張してみると、地表下30糎の黒色土中から灰釉陶器破片を発見、その近くより石皿の半壊のものが出土、又その附近より加曾利E式土器片が発見された。第2地区よりは自然石が相当量出土した。深さは30糎～38糎内外に一番多く、その自然石の附近から加曾利E式及び加曾利B式土器片が出土した。第3地区には量的には第1地区第2地区程には出土しなかったが、トレンチの各所に散在して発見される。

第５号トレンチと第６号トレンチとの交点には、集中して自然石が発見される。このことは先に発見された第１号トレンチと第２号トレンチの交点に出土した状態と畧々類似した形で出土した。このことに依り住居址ではないかとクエスチョンされる個所であるので、ここで第６号址と仮定して調査のオブジェクトとした。又第１地区と第２地区との８ｍ～１０ｍ附近に集中的に土器片が発見されるあたり、又黒色土層も二次的移動に依る堆積の凝固状態は、正に堅穴が埋ったとして考えるにふさわしい状態である。この事実からして、住居址としてよいと考え、第５号址とした。第６号トレンチは本日のところ以上の成果を得た。

調査団　友野良一・根津清志・長瀬康正

調査委員　石川教明・伊藤正男・北原通男・永原武男・補助員北原太蔵・事務局伊藤直衛田中静男・役場職員・伊藤邦司・小松昭三・小松晃・藤沢直平・向山幹男・鎌倉次郎・伊東義人・春日九一・赤羽英一・中村幸治・田畑恵康・伊藤文人・高遠高校小野沢重幸教諭・伊藤隆司・教諭外生徒１８名・伊藤富士夫・伊藤益生・唐沢光徳・伊藤孝・伊藤健・木下隆人・田畑敏幸・中原万寿夫・山田八千代・伊藤秀子・向山元雄・赤羽純一・伊藤和雄・山崎勝・北原文茂・北原明・北原由基雄・北原操・河南小学校長福沢伝一・文化財保護委員北原巌・星野成一・見学者１７名・高遠小学校長馬場玲一・辰野文人・酒井恒子・北原真智子・長藤小学校小田切浩・地元の人１０名・藤沢忠一・中原明人。

本日の作業午後４時３０分終了　高遠町役場に於いて打合わせ会を開き、本日の各トレンチの発堀状況について報告、明日の計画をたて解散する。

１２月１１日（日）晴

午前９時より前日に続いて発掘。作業予定、午前中は各トレンチの前日までの調査不十分の個所を追究し、その結果を見て午後の調査方針を立てることにして発堀を開始する。

第１号トレンチ。前日の調査でトレンチ西端附近には、遺物が特に多く出土していたので、トレンチ東側３地区の土師の発見された個所は、今回是非調査を行ないたいと考えていたが、これは調査期間中には何とか人員の割振りをして発堀する予定にして、第一地区に主力を注ぐことにした。午前中の発掘の結果、直径１０糎～２０糎内外の自然石が　（６図参照）の様な状態で散在し、しかもその在り方は、まったく自然なフィギヤーではなく、何となし人工的な行動が加わっているかの如く、調査する者誰しもが感じ得るフィギヤー的な状況にて出土。又特に注意したいのはこの散在する自然石の間に、土器片及び復元可能な甕が発見されるなどして或はこれだけの施設でしかありえないのではないかと考えられる程の疑問をもった個所となった。本日のところ、本地区は以上の諸点を考慮して、特殊遺溝として今後取扱うことが妥当ではないかという、県社会教育文化財指導主事林茂樹先生の御指示があり、調査員も先生の意見に賛成し得たので、今後は特殊遺溝として調査研究をする方針をかためた。

第２トレンチ、前日第２地区に環状をなして自然石十数個ヨ発見された。その附近をさらに詳細に調査すると、環状に配置された自然石を囲んで焼いた個所ではないかと思われる。東西４０糎、南北４５糎 畧々円形をなした変質赤色ローム質層であって、焼土化した炉址ではないことが判明した。又その近くの自然石の集中した附近からは、加曾利Ｅ式土器片が多く発見された。このローム質層以下は礫層に達し、この礫層下には遺物は皆無であった。第３地区の礫層は地表下２０糎程度で極く浅い個所である。第４地区北寄りにも、自然石の塊った個所が発見され、その石を囲む様な状態で粘土の塊いが出土したが、調査の結果別に特殊の遺溝ではな

いことが明らかになった。この粘土の塊に北接して、底部を上にして壺か甕か明らかではないが発見される。第2トレンチは、本日迄の調査の結果として、第1地区は表土下42糎附近南寄りに特に遺物が集結して発見された。この地区に第2地区より黒色土層の落込みも深く、ローム層も厚くなる状態であり、特に南より3mまでの間には木炭及び胡桃の炭化物が加曾利E式甕と平盤石との間より検出される。総じて第2地区の黒色土層15糎より、南第1地区は44糎の深さで、南に遂次落込を増している形層で、この深い層に、特殊な遺溝として注意しなければならない個所として前述の如く設定した。

第3号トレンチ　本トレンチは、分布図で見る如く、段丘に最も接した個所に設定したトレンチで、南を基点として、10米毎2地区に区画し調査した。結果的には黒色土層中には遺物は相当多く検出し得たが、特殊な遺溝とか、住居しらしき個所は発見できなかった。つまり、本遺跡の西限は第3号トレンチと含め西には、あり得ない結果となった。

第4号トレンチ　本トレンチは前日の調査で畧々全ぼうが明らかになっている関係上、本日の調査は、第1地区の東寄りと第2地区にかかる個所を中心として調査を進める。基点西より8mの地点深さ65糎の個所に甕の口縁部を発見、又その東9mの地点に並んで同じような状態で埋甕を発見する。この2個埋甕より南1段層が上ったところに底部を上にした土器を検出この甕の底部の層位が、ロー質層で、埋甕の層は黄色の砂混りローム層である。この発見でこの個所が畧々住居址であると推定し、第4号址として今後は調査の対象とすることにした。

第5号トレンチ　本トレンチは遺跡の限を決めるべく設置したトレンチである。調査の結果、第3号トレンチと同様、黒色土層中に多くの遺物は発見でき得たが、トレンチ中第1地区は、第4号トレンチの西端及び第3号トレンチ北端と接近している関係上、層位的には、第3号及び第4号の両トレンチで述べたような状況を　している地表で、これが第2地区より第3地区に及ぶと、第4号トレンチ第3地区で述めた様に、黒色土層の落込が深いように、丁度この線の延長と思われる位置より層位が深くなり、この層位に達したあたりに埋甕と、磨製石斧が発見された。又、埋甕が発見された附近には、第1号住居址及び第4号住居址と同様自然石の集石群があり、この集石群に混じって多くの縄文式中期加曾利E式土器片が発見された。このことより当個所を第6号址とし調査の対象とする。

結局第5号トレンチは、藤沢川段丘上に近い個所にあり、住居址は発見し得なかったことにより、本遺跡の北限と考えてよいことが明確となった。然し第3地区と、第6号トレンチとの交点には、住居址が発見され、これより北には、或は、住居址があるかも知れないが、今回の調査では、遺憾ながら時間的に拘束されているので不本意ではあるが打切らざるを得なかった。そのほか遺物の包含状態は、第2地区地表下30糎～40糎内外の黒色土層中より、加曾利E式、勝坂式。

第3地区の中央地表下50糎内外の層位に一番多く加曾利E式土器片が発見された。

第6号トレンチは全長26.6m巾1.5m南北に設定されたトレンチで、前日の調査にて畧畧トレンの概要は知り得たので、本日は特に遺物の多く出土した、第1地区7.8.9.10mの間を主体として発掘することにする。本地区で特に取り上げて考えなければならないのは、黒色土の落込状態である。基点No.0.0より南にも、第1地区と同様落込が続いている。この落込は、更に第7号トレンチの方向に伸びている形跡があり、又第1号住居址を含めて北は第5号及び4号東端より、第2号東辺から第1号トレンチ第1地区と通って南の畑に伸びている。帯状凹部と考えられる地形である。本遺跡の各址は、こうした、黒色土層中に設けられている関係上、住居址の壁の確認に困難をきたす原因にもなっているのである。こうした地形内での

第一地区は、又特に落込んだ黒色土の状態が異っている。これは、ただ単なる黒色土の落込みではなく、やや個々に湿気を含んで固まった形で検出され、多少重みをもった土質であることは、これは単なる黒色土層の二次的移動ではなく、凹部に雨水などの時流入して堆積した形であると、解した方が適当ではないかと考えられる。当第１地区は本日までのところ、地表下35.5糎内外まで除上したが、トレンチ内では壁らしき個所を発見できなかった。

このことは、前記の如き地形であるためかと思われる。しかし、６号址・３号址・１号址のような状況を見せてきている関係上、この個所をもって第５号址として調査することに決める。

第７号トレンチは、第６号トレンチを設定して、東限を知り得るかと言う考えで設けてみたが、６号トレンチだけでは到底遺跡の東限を知るに十分でないと判断して、第７号トレンチを設けたのであるが、これも調査人員及び日時の関係もあり、表土３０糎程度堀って調査した結果、黒色土層中からは数片の加曾利E式土器が検出されたに過ぎなく、黒色土は、もっと深く続いているので、今回は前述のような状態で残念ながら十分なる調査ができ得なかった。

本日の調査に参加した人　長野県社会教育課林茂樹指導主事

調査団　太田保・根津清志・御子柴恭正・長瀬康正・友野良一・堀口貞幸

調査委員　石川教明・伊藤正男・北原正男・永原武男

補助員　北原太蔵

事務局　伊藤直恭・田中静男

役場職員　守屋直人・天野達郎・北原侑・北原芳美・北原岩人・春日文悟・橋爪貞視
伊藤輝男・矢野謙三・田畑恵康・伊藤文人

彌生ケ丘高等学校生徒　北原久子・御子柴重美・毛利和子・小沢清子・有賀清子・気賀沢明美・竹上千穂・唐沢美江子・埋橋みな・伊藤節子・桜井寿子

高遠高等学校　池上正治教諭・中平正明教頭・生徒、伊藤富士夫・伊藤益雄・唐沢光徳
伊藤隆孝・伊藤健・木下隆人・酒井勝寿・田畑敏幸・中原寿史・山田八千代
伊藤秀子・伊藤みな子・伊藤すみ子・武井れい子・春日和子・高橋和子
守屋文一・向山元雄・赤羽純一・伊藤和雄・山崎勝・唐木多喜秀・北原今朝幸。

高遠中学校　池上正直教諭・中平正明教頭・外生徒４９名

赤穂高等学校・北原昌紀教諭

河南小学校長　福沢伝一

見学者　高遠小学校西沢健仁教諭・市川脩三教諭・中尾みどり教諭外児童５６名・上農高校伊沢幸平教諭・竹淵三郎教諭・辰野高校北原直人教諭・藤沢小学校市川幸一教諭・地元１５名

午後４時３０分終了、現場解散

調査団及び事務局合同打合、役場１１名。本日の発掘状況の報告と１２日の作業計画について。午後１９時解散。

１２月１２日（月）曇後雪

藤沢の谷を吹き通る風は、肌をさすように寒い、大きな焚火を二個所たき、体を温めながら発掘しなければならなかった。本日は発掘人員の数も少い関係上、第１号住居址の発掘に全力を尽すことにきめ作業を進める。友野・根津調査団員・堀口調査団員は第１号住居址・福沢伝

一調査員は第4号住居址、長瀬調査団員は第6号址及び第5号址の調査を担当することとし作業を進める。

第1号住居址は、既試掘の時壁の確認で相当困難であることを予想していたので、発掘は最初から壁の発見を如何にしたら適切に行なえるかと研究したところ、多くの意見が、先ず床面を遂次追究しながら拡大して行く方法が一番適切ではないかとの結論に達したので、炉址を中心として東西南北3mの広さを予想して、表土を除土する人と床面を追求する組とに別れ、四方に調査を拡張して行く、西に1.8m東に2mを発掘したが、依然として黒色土層は続き壁らしい壁には突当らない。北の方向でも東西と同様壁らしきものは発見でき得なかった。最後に南の方向に拡大して行くと、炉址より2mの地点が床面より7糎下ったロームの層位が発見された。このことによって、壁は発見されずとも、他に異った遺溝か、或は別な住居址か、又は復合の形か、いずれかの区画には相違ないと判断して入念に調査を進めたところ、床面よりわずか上った黒色土層に、口縁部を上にして置いたのではないかと考えられる程の意識的な状態で加曾利E式の甕が発見される。（14図2）その甕より東方1.5mの位置にやはり黒色土層中に、北の方向から押倒した様な状態で、やはり加曾利E式の甕が発見された。（図16の2）の甕はローム層より僅か上った個所に、まったく同じ状態で発見されたことは、或は第1号住居址に属する遺物か、又は全然別この遺溝に属するものか、本日のところまったく判然としないので調査を明日に譲り、周囲の状況より総合判断の立場でもっと入念に発掘を行なうべきだと考え、本日はその段階でこの個所は中止することとした。

次に炉址の部分より北の方は、最初に試掘トレンチを設定した個所で、巾1.5m、長さ3mに堀削してある。所で、床面も一部露出している関係上この個所を北西の方向に除土を行なったところ、床面10糎内外の高さで炉址より2mに、径10〜25糎程度の集石が検出され、その集石を実側面図に記録し更に写真を写した後、その下部を調査したところ、ロームのよく敲かれた床面に接して、中期初頭型式と云われている波線と平行波線縄文土器と、石斧を発見。又その近くから勝坂下土器片が同じ床面に接して発見（14図1）現在問題化している勝坂式の古い方に伴って出土する中期初頭型式があるという問題に対して、1例を提起したと考えられ今後勝坂式に伴う中期初頭型式の有り方の究明に好資料を提供したと考えられる。次に南西の区画では、炉址より2〜3mの個所に（第5回、第10回、第11回、第12回）に見る如き集石群を発見、この集石群は床面上より5糎〜13糎の黒色土層中にあるもので、一つのサークルをなして群在する。一つのサークルが20個直径5〜6糎より24〜25糎大の河原石で、よくオブザーヴすると、一見やっぱり手を加えたようにも見えるも、これはやはり住居址を放棄する時、古代人の呪術的な考えで、こうした処置をとったのではなかろうかと考えたくなる状態である。又、炉より南西2.5mの個所にやはり一群の集石が発見され、その集石を実測図に落しながら調査を進めると（16図1）に見る如き2個の平盤石が甕の内に投げ入れたような状態で発見、本日は終りの時間も切迫しているので、これ以上発掘は行なはないことにした。

次に東壁を追究した結果、炉址附近の床面を一応基準面と看做、畧々水平に除土作業を進めたるも、黒色土層は依然として続き、ややもすれば、住居の線を逸脱したのではないかとの疑念を起す状態であるので、本日のところ調査を打ち切り、明日の調査に期待をかけることにした。

第4号住居址。福沢伝一調査員の担当で調査、前日の調査で南壁が出土していたので本日は、埋甕を中心に特に北西の個所を調査することにし発掘を行なう。

埋甕出土の状況及び、散在する自然石の群、特に埋甕より北２$m$の地点の集石は、その数に於いても多く、或はまったくの自然層ではないかと思われる状態で発見された。（第７図参照）本日のところ北壁を発見することはでき得なかった。埋甕の発見された位置より西の方向は、第４号トレンチで切った断面で、地表下２６糎で自然の礫層に達してしまったので、この巾１.５$m$のトレンチは、完全に床面をわずかではあるが掘込んでしまっている。従って西方の壁は検出することはできなかった。本日の調査の結果、柱穴も床面も明らかでない状況からして、住居址と見るべきか、或は、住居址とは異った貯造址とした方が適切ではないか。先日は、集石のある特別の遺構ではないかと判断したが、本日はそれとは異なり、貯造施設とした考え方が最も妥当ではないかという論議で作業は終了した。

第５号址。第６号トレンチ内のみの調査でそれ以上の拡大発掘は、発掘に参加してくれる人の都合で実施でき得なく、前日に続いて一部調査を行なったのみで本址は打ち上げることとした。

第６号址。第５トレンチの東端に発見された址で、前日の調査で、自然石に混じって加曾利E式の土器片が出土していた個所より、第６号トレンチ寄りに拡張して調査を進めたが、明らかな床面も壁も発見でき得なかった。本トレンチの項では以上の記述し、後は第６号址として後述したい。

本日の参加者

調 査 団　友野良一・根津清志・堀口貞幸・長瀬康正

調査委員　石川教明・伊藤正男・北原久治・北原通男・永原武男

事 務 局　田中静男

役場職員　伊沢裏・村田森雄・伊藤輝男・伊東岩男・広瀬和夫・北原幸司・田畑友子・田畑恵康

高遠高等学校　小野沢重幸教諭・伊藤富士夫・伊藤益生・唐沢光徳・伊藤孝・伊藤健・木下隆人・伊藤すみ子・武井れい子・春日和子・高橋和子・守屋文一・向山元雄・赤羽純一・伊藤和雄・山崎勝・唐木多喜秀・北原今朝幸

河南小学校長　福沢伝一

見 学 者　長藤小学校下平弘光教諭・酒井幸衛教諭・小池勝雄教諭・外児童６５名・河南小学校児童３５名・地元住民１３名

本日の作業４時現地解散

１２月１３日（火）曇り後雪（３$cm$）

本日は天気も悪く調査には不向の天候であった、予定した期限も切迫している関係上、延期は認められない状況にあるので、発掘に参加した者は全力を尽して作業に当ることにする。午前９時、全員参集、団長より今日までの発掘に対する成果の概要報告と、今後の予定及び諸注意事項並びに各調査個所の問題点の指摘があり、９時３０分より発掘を開始する。作業中寒くなると、事務局で用意してくれた焚火にあたり、手足を温めながら、発掘を進める。

第１号住居址。前日までに西の床面の境と思われる個所が発見されるのみで、他の周壁は確認されていないので、本日は、１２日迄の除土では、不十分であると考え、人員を東西南北の４地区に配分して、専ら除土作業に主力を注ぐ、最初に除土した土を、個所によっては三段バネの形となり、発掘は意外にはかどらない。このことは、前述の如く、壁面が明らかでないという悪条件によるもので、直接発掘に当る者にとっては、こうした重復の作業を繰返すという

ことは、相当の精神的苦痛であるが、全員よく発掘の主旨を理解して作業を進めてくれる。四地区に別れて除土した結果予定した広さに拡張し得たので、次に東壁をつきとめるため、1.5mの巾で長さ4mを拡張したが、ついに壁面らしき個所を発見することはできなかった。炉址より、東北2.5mの位置に自然石の群が発見される。又、この個所よりローム面が遂次東に底くなる傾向を示し、或はこの石群が東限ではないかとも考えられるので、これ以後は、北壁の調査の結果を見て、調査を続けることにする。次に北壁も三方の状態と畧々同じで、ローム床面を頼りに水平に清掃して行くと、炉址より2.2mの個所に集石が発見され、それより更に1.3mにローム面がわずか5～6糎の比高をもって、上昇している線を検出し得たので、こえを基準にして、東西に床面を追って行くことにする。ここで一端作業を中止して、集石群の出土した状態を一応実測し、（第5図参照）作業の進行を測る。ここで本住居址特有の集石群の一応の処置ができたので、更に床面を追求するために、除石を行なう。炉址より北の床面の清掃が進むに従い3.4mの位置に7糎の高さでロームの段を発見、更にその面を北に50糎拡張して調べると、この高さでなった層は、このまま北に伸びているので、一応この段の個所をもって仮に北壁とし調査を打ち切る。次に北西の方向の調査では、炉址より4m附近が北壁と同様わずか6糎ではあるが、一段と高くなり、その高くなった層はローム面が敲かれた様子もなく、ロームそのものである自然の状態を示しているので、この相位が壁であると考えられる。次に南西の壁の検出であるが、南西には、前日甕の中に平盤石が発見された個所で、床面とは異るローム面が検出されているので、壁はこの附近にあることは畧々間違ないと思い、集石を除いた下層の床面を清掃したところ、巾10～15糎、深さ8～10糎の周湟を発見、又周湟内にも1.2のピットも検出され、この地区での壁であることは確定となった。発見された周湟は西壁にも連なり更に北西の一段と高くなった個所に連なっている。この周湟の発見で、北及び北西で一時壁の追求を中断していた仮定線は壁面であることを確定ずけたのである。さて次は南壁の検出である。幸い先に発見されている周湟を基準として調査を進めたところ、前日発見された。（図14の2）（図15の2）で見るように周湟と甕の出土によって壁を知ることができた。東壁も南壁を発見したように、炉址より東2.5mの位置まで周湟が廻っているので、この周湟をもって東壁であることはほぼまちがいないことがわかった。以上本日は第1号住居址に主体をおいて調査を進め他の個所は中止した。

本日の調査の参加者

調査団　友野良一・御子柴恭正・長瀬康正・堀口貞幸

調査委員　石川教明・伊藤正男・北原久治・北原通男・有賀広徳

調査補助員　北沢大蔵

事務局　伊藤直栄・田中静男

役場職員　井東大治郎・広瀬和夫・伊藤賢一・守谷基弘・田畑恵康

高遠高等学校　伊藤隆司教諭・小野沢重幸教諭

高遠高等学校生徒　伊藤富士夫・伊藤益生・伊藤孝・伊藤健・山田八千代・伊藤秀子・伊藤みな子・高橋和子・春日和子・向山元雄・伊藤和雄・宮下親芳・唐木多喜秀・松尾元広・伊藤隆・丸山裕子・西村ちず子

一般　北原実夫・松下貞子・橋爪みつえ・西沢百合子・伊藤しず子・中村とみ・西沢忠太郎・森田房吉・矢沢きくゑ・竹村いさを

見学者　高遠小学校白鳥教諭・北沢清志教諭・外児童13名。長小学校小田切浩教頭・地元の人8名

午後4時30分現地解散
調査団事務打合わせ、高遠町役場にて本日迄の発掘の成果と明日の整理について打合わせを行ない7時解散。

12月14日（水）晴

午前9時作業開始。13日迄の正規の発掘は一応終ったので、本日は前日迄の調査で明らかにでき得なかった個所に主力を注いで、調査をすることとした。

第1号住居址。本住居址は前日の調査に於いて、住居址の大方のプランを発見し得たが、まだ床面の完全の清掃ができていないので、更に丹念に調査を進めたところ、平面実測図に示す柱穴及びピットを発見。その外2～3周湟に接して出土した遺物は、炉址より東南周湟に接して（図16の2）の土器は、周湟より外側に20糎離れ、底部をローム層に接着して外側に横倒の状態で発見。器形は加曾利E式キャリバ甕形土器。径31糎、高さ32糎。その外東側周湟に接し径32×40～20の15内外の数個の石群、これ等周湟に接近した遺物として、本住居址に何如なる関係を有するかは、考察の項で述べる予定である。

第3号住居址。本住居址は堀口調査団担当で、11日の調査で特殊遺溝ではないかとの意見が強かったため、調査もその方向で進めたるところ、午後炉址を発見。この炉址が発見されたことに依り、本址が特殊遺溝ではないということが確定されたので、急遽住居址としての観点に立って調査を進めることにした。炉址の発見された南2mの地点に落込を発見、それより南20糎の個所に南壁が検出される。炉址は自然石を組合わせたもので、炉の深さは極く浅く、石組の石の3分の1程度ローム面に埋った状態で、第1号住居址と同様な炉址である。又炉址附近からは多量の土器片と、炭化物が発見される。次に東壁及び北壁を検出するため調査を進めたところ、炉址より北へ3mの個所に北壁を発見した。次に東壁を追求したところ、炉址より、2.4mにP2を発見し得た。これにより附近に壁があることを予想し、調査したるところ、$P_1$に石の群が発見される。それより30糎東寄りに僅かではあるが、床面とは異った層を発見し得、これが東壁であることを確認した。これにより、南・東・北の三方の壁を検出し終ったので、後西壁追求のみとなったが、西は第2号トレンチで切られている関係上、はっきりした壁を得られるかは疑問であるので、一応床面を清掃し床面に於ける施設の検出に調査の方行を向けたところ、炉址の北2.4mの地点に径60×42、深さ21糎のPt6を発見。又炉址より北東1.8mに$P_4$を検出、つづいて南西の方向60糎に$P_5$、1.8mに$P_3$を発見する。この成果により、本住居址は炉址を中心として6個のPtと3方の壁を発見し得たのである。最後に残された西壁発見であるが、実例平面図で見る如く第2トレンチにて切られているところより、推定の点線を結ぶ程度とならざるを得ない状態となった。又南西の壁に添って巾10糎、長さ1.8mの周湟を検出したが、この周湟の西端が或は西壁かも知れない。

第4号住居址。本住居址は福沢伝一調査員担当で調査された住居址である。12日に発見された埋甕2個に依り、今迄第3号住居址の頭初考えたような舌状台地両端に位置した特殊遺溝ではないかとの観測は同様否定され住居址として取扱うことにした。埋甕の発見された個所は、第4号トレンチ内であるので、この埋甕を中心として南方を調査したるところ、30糎の地点に一段と高くなったローム層が検出される。このローム面上に底部を上に向けた土器（図24の1）を発見。このローム異層が一応の南壁とする。次に埋甕の北及び北西には夥しい自然石の石群であるが、この石群の処理と床面及び壁の関係である。先ず石群の処理に当っては、写真（図23の2）と実測平面図にある如であるを一応残し大方の小石を除石してみると、埋甕よ

り北西２ｍの地点に（図第２４の１）で見る如き、加曾利E式に多く発見される大形炉址を発見する。この炉址の発見により、前述発見の埋甕と合わせて住居址であることは確実となった。

本日の参加者

調 査 団　友野良一・長瀬康正・堀口貞幸

調査委員　石川教明・伊藤正男・北原通男・福沢伝一

調査補助員　北原太蔵

事 務 局　伊藤直栄・役場職員伊藤輝男・伊藤賢一・広瀬和夫・田畑恵康・一般森田房吉　岩重きみえ・橋爪みつえ・北原実夫・松下貞子・中村とみ・竹内いさを・矢沢きくえ・西沢忠太郎・西沢百合子

見 学 者　河南小学校児童２０名
　　地元５名

発掘参加者　248名

見 学 者　260名

測　　量　高遠町役場

写　　真　高遠町牛山写真館

午後３時発掘終了、遺物は高遠役場に運搬保管。後片付をすませ夕日が落ちる板山遺跡をあとにした。

土器整理１２月１７・１２月２４日両日遺物の整理及び実測並写真等報告書作成の準備。

第１号住居址。本住居址は発掘経過の項で述べたとおり試堀の時に発見された住居址で、その時より壁の不明瞭な点は、長野県社会教育課文化財指導主事林茂樹氏が現地踏査の折すでに指摘されていることであったので、発掘方法もその点十二分注意して実施し、徒に労力を消費しないように留意したが、最後が最後まで壁の確認に悩まされた住居址であった。第２に、住居址内及び周湟に添って持ち運び可能な自然石が、やや意識的に存在したという事実。第３に、当住居址では古い方に属する勝坂式中葉～後葉初にかけての土器片が特に炉址周辺に集中して発見されていること。中期初頭型式の土器片（図２９の２）の破片が床面からただ一片打斧を伴って発見されたのみで、後は加曾利ＥＩＩ類土器が大分部をしめていること。第４に周湟外の３つの甕について。以上が本住居址の特に論議を呼ぶ点だろうと思う。この事実に就いては考察の項で述べることにしたい。

さて、本址のプランは、南北７ｍ、東西６．３ｍ、深さ１．０２ｍ～１．１０ｍ不整円形をなす堅穴住居址である。壁は、前述発掘経過で記したように、黒色土層中に堀込まれて作られた住居址で、並通ローム層中に作られた住居址と異り、黒色土層を掘削して頭初堀り込んだ個所の痕跡は明らかに区別することは不可能であるため、これをもって完全な壁面とすることはでき得ないが、当時の壁に近いものかと思う。当住居址の四方の壁が完全な黒色土層であって、ただの１個所といえどもローム層が現われていないということは、当個所が地形的変化のロウランブであったことに起因するものである。このことは第１トレンチ、第４トレンチ、第６トレンチの黒色土層の落込に依って知り得ている事実である。もし１・５・６号址が完全な発掘ができたとしたら、このことを適確に証明し得たであろう。

次に床面であるが、本址の床面はローム層中に設けられたもので、あまり踏固められていなく、注意して発掘しないと床面を削り取られそうな床面である。

炉址　本住居址の炉址は試掘の折りピットに出土したため、原形を崩された状態であるため、完全な復原は不可能であるが（図１０の２）に一応復原を試みてみた。その形は半円形で自然石を用いたもので、直径は７０糎×６０糎、深さ１５糎程度の小形のものである。炉の中は赤く焼けている。炉址の位置は中央やや南東寄りである。特に遺物はこの炉址附近に著しく集積した形で発見された。勿も中期初頭型式・勝坂式等の遺物が多いことは、試掘当時勝坂式の住居址ではないかという考えをおこした原因である。

ピット全部で１３個、そのうち柱穴と思われるものに、$P_2P_4P_6P_{11}$ の４個と考えてみた。他に$P_3$ $P_5$ $P_7$ $P_8$ $P_9P_1$ 等深さ４０糎内外のピットが発見されたが、或はこれ等が建築中如何なる役割を果していたか、又は生活用具の何らかの施設かは推測の域を脱しないものである。

周湟　周湟の最初に発見されたのは、南西の$P_{13}$附近の集石を除いた下層に黒色土の落込を発見したことにより周湟であることを確認し、この周湟は北の方では$Pt_{13}$より北３$m$で終る。南は南壁を畧々廻り東壁に移るあたりで終っている。北の方には、そうした形跡は認められなかった。周湟の巾は20～30糎内外で深さは８～１０糎、周湟内には２、３浅い径２０～３０糎、深さ５～１０程度Ptが西と北にあった外は、何の施設も発見でき得なかった。

第３住居址、分布図にあるように、第１号トレンチと第２号トレンチの交点に発見されたもので、舌状台地南端に位置した住居址である。本住居址も第１号址と同様、壁面が黒色土層のため、完全なプランを知ることはできなかったが、周湟の一部や、柱穴等の位置からしておおかたの推定は許されると思う。本住居址は南北5.7$m$.東西6.3$m$.深さ60糎隅丸方形竪穴住居址である。

炉址。当住居址の炉址は、実測図で見る如く、東と南を自然石で囲んでいるが、発掘中或は西方の石を掘り取ったかも知れない。このことは、第１号址住居址及び第４号住居址で発見した如き集石があった個所であるので、集石と違い除石したかもしれない。炉址は、第１号住居址と同様、ごく浅いもので炉址の内部は赤く焼けていた。

周湟　本址の周湟は炉址より南西２.２$m$の個所より西に、巾１５糎、深さ６糎、長さ２$m$にのみ発見し得たもので、他には周湟らしきものは発見でき得なかった。

柱穴　当址の柱穴は$P_1$ $P_2$ $P_3$ $P_4$ の４個であると考えている。４個の外に炉址の西方に$P_5$、北壁に接して$P_6$ であるが、$P_5$ $P_6$ は柱穴は考えられない位置にある。従って４柱址の住宅と推定してよいと思う。

床面。本住居址の床面は第１号住居址と同様、ローム層に設けられたものであるが、このローム層が黒色土層の落込と畧々同一高にあるもので、第１号址で知る如く、床面とローム層とはわずか床面の方が低い程度である。床面はあまり堅く踏固められてはいなかった。

遺物。懸垂状隆起文と半截竹管文・及び隆起文をはさんで左縄文を施し、半截竹管具で縦に縄文を摺消した信濃資料B三類に分類されている土器、縄文を縦、線状に摺消したB方四類土器が本住居址を代表する遺物である。従ってB三、四類に否定すべき住居址と考えられる。炭化物、第２号トレンチの石の下より（くるみ）の炭化物を発見。

第４号住居址。本住居址は前記経過報告の項で述べたように、第２トレンチと第４トレンチの接点に発見された住居址であり、最初は特殊遺溝と考えた個所である関係上、埋甕が二個発見されても、まさか住居址になろおとは考えなかった住居址で、実測図で見る如く炉址は発掘の最後に発見された関係上、住居址の全体を調査することのでき得なかったことは誠に残念なことであった。ここでは調査し得た迄の報告にとどめる。

埋甕。南壁に接して（図２２の１）（図２３の２）（図２５の１）に示す状態で出土した２

個の埋甕の間隔は６０糎、ごく接近して埋置してあった。埋甕は１住居址１個ということは、多くの例があるが、２個並んで埋てあるということは例が少ないのではないかと思われる。

壁、本住居址の壁は南側が確認されたのみで他は調査できなかった。南壁は黒色土層も浅く、また、ローム層も１０糎内外で黄色砂礫層となり表土より床面まで２３糎の極く浅い住居址である。従って１０糎内外のロームも、或は置床ではないかと思われる位い形式的である。この住居址の深さが少いということは、藤沢川の河成段丘に近いため、長い年月の間に黒色土が流失したためかもしれない。４号住居址のみではなく、第３トレンチ以西は、これと同じ位いの層位をなしているところからそお推定して大きな誤りはないと考えられる。

ピット、本住居址のピットはP1 P2 の２個だけで、柱穴かどうか　かに決定できない。

炉址、本住居址の炉址は加曾利E式の最盛期に多く作られた豪壮なもので、その大きさは東西１.15m、南北１.2m、深さ30㎝自然石を組合わせた炉址である。炉口は南にあり一段と低く炊よい作りとなっている。この方法は伊那地方のこの期に数多く用いられている形である。

床面、床面は先に壁とところで言及した様に厚さ１０糎内外にあったもので、第１、第３号址同様堅く踏固められてはいなかった。

遺物（図４５の１.２.３.５）（図４５の３.４）口縁部に斜状に連続刺突文様と渦巻文を施したもの、隆線による藪手状文と、半截竹管による施文（図４５の６）、隆線文の先に渦巻文を施し、その間を綾杉文による充塡（図４５の７）B二類の土器と、大きい隆起文と竹管による併行線文と施したB一類（４５図２の１・２）口縁部に節状具に依る波状文を施したもの等も一、二類の加曾利E式でも古い方のものを出土した。

埋甕１、（図２２の１）口縁部が開き頸部がしまって明部が３長を甕形土器で、関東地方加曾利E式土器によくみる器形である。頸部には渦文状の隆線があり、體部には波線の唐草風の文様の間を縄文で充鎮している優美の甕で、C三類に分類される土器である。

２.（図２５の１）口縁部は垂文、頸部に粘土組を波状に施し、その下部に隆線による渦巻文を等間隔に施し、その中間を斜に竹管文で埋め、體部は懸垂状隆線文の中間で渦状に結束し、體部の張よりやや上を横に太い隆線と波状粘土組に依る帯にて連続し、その空間を更に波線文で区画し、その区画内を半截竹管で引いている。次の體部の施文方法は、隆線と粘土組による波状文による横帯文はなく、波線による綾杉文にて充鎮し、懸垂渦巻文、隆線文による横帯文を交互に使い分けた、実にバランスに富んだ施文法の土器である。以上発掘結果より本住居址は縄文式中期加曾利E式の古い時期のものとしてよいものである。

第５号址。本址は第６号トレンチに発見したものである。担当は長瀬康正調査団。表土より２０糎はトレンチ溝、加曾利E、土師・灰釉各土器片２５糎～４０糎５０糎迄の層位には加曾利E式、６０糎までの層位縄文式加曾利E式、土師式土器片出土。表土より６５糎にてローム敷土、ロームの下層からは黒曜石細片、　手条痕文土器片が出土した。以上各層位的に遺物の出土状況を区別してみると、ローム敷土面６５糎までに加曾利E式、土師式が混在していること、又ローム敷面下に薄手修痕文土器片が出土する事実は、その外に別な遺溝があるのではないかと考えざるを得ない状態である。又第１号住居址の周湟外に発見された甕も、ローム面に置かれた形で、平盤の自然石をのせてあった例などから考え、黒色土層中に置かれたこうした例は、自然石の集石群などと合わせ考えみると、今後の十二分に研究を要する問題であろう。

土器と組石について、組石が砥石として使用されたものか、石皿として使われたものか或は工作用敷石として置かれたものかはすぐに決定しがたいが、やはり人工的な配石と考えられる。組石面に灰釉片が出土したが、この発見された位置は表土より１５糎下で、本址とは直接な関

係はなさそうである。土器、粘土組を張り付けた文様の土器片で、加曾利E式のa一類に分類される型式の土器片である。以上調査の結果本址は重復したもので完全な住居址となり得るかどうか今までの調査では疑問であるとしておきたい。

第6号址。本址は第6・第5トレンチの交点に発見された址である。当址も第5号址と同様調査日時の都合により完全な調査ができ得なかったので、発掘現況を記して報告としたい。

1．丸石と平石との組石があり、その個数は約10個90㎝×90㎝、組石の下部には何も発見できなかった。組石といっても整然とはしていなく、丸石と平石の組合わせかやや人工的であると思われるもの。

2．この組石より約20糎ほど北に加曾利E式土器が縦に置かれてあった。

3．丸石より南約60糎の平石45糎×45糎、厚さ10糎、平石の下約1～2糎に黒色土があり加曾利E式C三類式土器胴部下水平に割りかいたものを土中に埋、まわりに石をもって囲んだ土器が発見され、その中より多量の木炭が出された。

4．この土器の口経部と同一面に縄文土器片、敲製石斧の頭部を発見。

5．本址の床面は、表土下60糎層位に発見された。（27図1・2・3）の埋甕の発見状況、本甕は口縁部がL字になり、その縁に縄文を施してある特殊の土器である。又体部は、渦巻文が懸垂しその中間も縦の波線文にて充鎮したもの、写真で見る如く底部を欠いていたもので、C三類に分類される土器である。

石斧。（石器実測図参照）乳棒状磨製石斧が組石層に発見された。従って加曾利E式土器と伴出した状態である。以上第6号の発掘状況であるが、現在のところ、住居址として取扱迄にはいたっていないが、住居址となる可能性のある址である。

## 藤沢川の古代文化

5万分の一（高遠）図、藤沢川は杖突峠に源を発し（1247m）高遠にて三峯川に合流する河川である。この藤沢谷の古い文化は縄文式早期押型文より灰釉にいたる遺物を出土している文化圏で、最近藤沢地区で山型・穀粒両押型文土器が発見され、以前発見された繊維土器と合わせ、早期の良好資料を加え藤沢谷の文化が次第に明らかになりつつある現状である。現在藤沢谷に発見されている遺跡は（信濃資料）、藤沢地区、峠、赤井沢縄文、立石縄文、古屋敷縄文、片倉臼沢口、勝坂、加曾利E、薬師堂下・問・縄文、松倉・白藤・縄文、小坂・縄文、御堂垣外宮の前、北原・権堂垣外縄文、神明上和手垣外縄文、坊垣外・勝坂、加曾利E、北原長久附近縄文、荒町・宮下・縄文・勝坂・加曾利E・神明縄文・台上村・勝坂・加曾利E・石棒。長藤地区。中条八幡屋敷、縄文中期初頭、勝坂。宮原縄文土器、縄文後期、ネズミ垣外後期、黒沢鎌立縄文。板山釈迦堂、繊維土器、勝坂、加曾利E式、土師、前・後、須恵、前期、灰釉。横山、縄文土器、峠、土師後期、須恵、前・後期、彌勒、土手垣外、土師、後期、須恵、後期、灰釉、竹ノ久保、縄文、西沢垣外、縄文、灰釉、的場新館、縄文石斧、沢口、縄文石斧、後期須恵破片。等の遺跡が知られ、縄文式早期～平安時代に至る文化地域である。

### 地　形

板山釈迦堂遺跡は、上伊那東部の北地域で、杖突峠、海抜1247m、西に1650.3m守屋山、東に1411mの山をひかえ上流より、峠、古屋敷、片倉、薬師堂、御殿垣外、新井、水上荒町、北原、台、栗田、四日市場、中条、供塩、中村、笹野、彌勒新田、板山、栗副、彌勒、的場等藤沢川に添った部落を経て比高527m、海抜720mの高遠町にて三峯川に合流する急

流地帯の峡い谷間である。本遺跡釈迦堂は高遠町に寄ること3.9Km、海抜800mの地点にある遺跡である。板山釈迦堂附近は長藤地区でも割合広い地域で、旧長藤村の中心地で小学校の所在地でもある開けた場所で。地質、中央構造線が通過している地点であるので、地質学的に見ても興味深い個所である。地質は、鹿塩ミロナイトMK石英内緑岩質ボーフイロイド様圧砕岩およびヘレフリンタ様圧砕岩と、Sch、三波川ミカブ帯、三波川結晶片岩類。僅かではある、Md変輝緑岩帯及び、領家花崗岩類の非持石英内緑岩が分布する複雑なる地質帯で、遺跡地はMK岩質による屈曲舌状台地で、MK質上にローム層が置かれ、その上に生活面を営んだものである。

まとめ

土器　藤沢川沿岸からは前述のように早期押型文があり、当板山釈迦堂遺跡がわは、信濃資料刊行の（昭和31年）時調査された資料に依ると、繊維土器早期後葉、中期中葉勝坂式中期後葉加曾利E式土器、折石斧、半磨製石斧、磨製石斧、石錘、土師、前期、後期。須恵器前期、灰釉等が出土していた遺跡である。

今回土地改良工事のため、緊急発掘を行なった成果を一応整理して見ると次のようになる。

1、各トレンチを総合してみると。勝坂式中葉極成期、中部山岳では内藤Ⅱ式に併行する。太い隆起文と爪形文の　鮮な刻文。体部に粘土紐の貼付に箆先で押刻し、その内を竹管による併行線文を施した。勝坂式後葉に属する土器等が主体をなす。

勝坂式中葉～後葉の群と、勝坂式の風味を伝える退化した爪形を止めるもの、粘土紐を貼付たa一類土器、頸部にあたる部分に爪形文様帯及至隆線による矩形のようの文様帯がつくられ、その中に、波線と隆線との渦巻及び浮彫状の波状文が施文されている。体部には復雑な隆線の唐草文様及至蕨手状の文様が施されているか、一本の隆線を垂下し、隆線との間に波線の波状文を施し、それらの充鎮文として箆描きの直線文及至綾杉文の施されるもの。b二類土器。

頸部に渦巻文、体部に波線唐草風の文様、櫛描施文具による条線文をもって充されるもの、渦状を呈する隆線縦及至斜走する平行波線による文様帯c三類に併行する土器。

口縁部の文様帯が隆線の渦巻の場合、隆線と枠をつくって、縄文又は波線で充鎮する場合、体部に隆線及至波線の文様が施されるか磨消手法を加えるか、波線式は波線の波状文が垂下されるものもある文様の土器、d四類。

深い短線が斜行及至綾杉状に施された文様f六類等に分類し得る。要するに、加曾利E式1～6類までの土器群となる。

その外縄文後期に属す小土器片、土師後期、須恵後期、灰釉等である。

住居址　第1号住居址は（図37、1の11）平出7号址出土の土器中期初頭型式に見る土器、口縁部を欠いているのでよくわからないが、胴部に隆帯をめぐらし、それに連綾指圧痕を加え、その下部に縦平行に波線文帯をおく土器。

図（37、1の）1.5.8.10.11、（図37.2の）3.7口縁部に巾広い波線文を横に引き、その下部に平行に、又は半月形に隆帯文をめぐらし爪形文の刻目にて飾る勝坂式Ⅱ式は新しい勝坂式の要素を示している。井戸尻Ⅱ式、平出7号址（図14、1）は信濃資料図版五八の1の腹部に見える。隆起文との間を横に竹管で引いた区画文で、勝坂式Ⅱに属する土器、（図37、1）の6.7井戸尻Ⅲの文様構成の要素より加曾利Ea一類に移行する段階の土器ではないか。（図37、1）の3.9は、伊那市大字伊那宮ノ前出土、口縁部で変曲し體部がや

や張る甕形土器、縦に粘土紐をおき、次に絡状に施し、その先端が渦文となる。又は半截竹管により縦方向に施文した土器、a一類（同図、2）の10.11等粘土紐を格子状に貼付けたものB二類（同図、2）2地文を縄文で施し櫛状具で平行波線文を大きく孤状に大胆に引いた土器、C三類に、同図の4.5.9等B四類に併行する土器である。以上土器の大方の分類である。さて、本住居址は、最初発掘した炉址附近出土の勝坂式Ⅱに属する土器が多量に発見されたこと、又床面接して発見した（図14、1）の土器等より勝坂式住居址としてよい資料が揃ったとして発掘を行なっていたところ、周湟に接して（図16、2）（図14、2）にある如きa一類に併行する土器が発見され、又その外壁に近い個所よりa一類の土器が出土、さてこの新しい土器群の出土位置並びに出土状況からすると、先ず第一に（図16、2）の取扱であるが、周湟に接した個所を住居址内と考えるが周湟外は別個の遺構とするか、ことに遺物取扱の大きく区別される基となる。この事実は（図16、2）のみでなく、（図14、2）（図18）の周湟のPt内出土の土器等、周湟にいずれも接している遺物で、このa一類に属する土器をどう取扱うか。私は、第1号住居址で一番苦労した壁の確認で、つくづく考えたが、床面が周湟外と畧畧同一の高さにあること。

周煌に近く壁が住居址内と外部と隔絶されていたか、この点明瞭でないが、私はやはり、周湟に接していた遺物は、本住居址のものとしてよいと考えている。然も、これら遺物は、加曾利E式でも、勝坂直後のものとしてよい土器である関係上、本住居址は、勝坂式より加曾利E式に移行期の住居址で、住居址の各所に勝坂式の風味を表現している住居址である。今後更にエグザクトな分類によりこの期に於ける住居址の性格を明らかにしたい。

第3号住居址（図44、2）a一類3・6、曾利Ⅰ式5、曾利Ⅱ1.2.4に分類される土器等より、加曾利E式～Ⅱ式の住居址である。

第4号住居址、a一類・B二類の土器を出土しているが、埋甕をもって本住居址の直属の土器とすれば、B二類C三類に分類される土器であるが、一住居址の遺物とし同時期セットとして取扱ってよいものであろう。以上3住居址に対して一応の分類を試みてみた。

## 石　器

(1) 石斧、本遺跡出土の石斧は、打製石斧と敲製石斧・磨製石斧に分けられる。

第1号トレンチからは、短冊形打製石斧2個、短冊形ではあるが柄部を両方から欠いたもの1個、いずれも輝緑岩。

第4号トレンチ、短冊形打製石斧2個、敲製石斧1個、いずれも輝緑岩製である。

第5号トレンチ、短冊形打製石斧、岩質は輝緑岩2個と縦形石匕1個

第1号住居址、短冊形打製石斧6個、石匕横形1個。凹石2個、内1個は丸形他の1個は打製形の両面に凹を有するもの。

第4号住居址出土、短冊形打製石斧1個

第6号址出土、磨製石斧、この磨製石斧は今回の発掘では1個発見したのみで、他は打製石斧と敲製石斧であった。特に短冊形が多く、撥形、両頭形等は発見されなかった。

## 石　鏃

黒曜石製、第三型式のもの1個。end、scraper 黒曜石製で本発掘に於いては1個第6号トレンチ内5号址より長瀬康正団員が発見、黒色土層中より、長さ8.5㎝、巾2.7、厚い木の葉状をなす。断面は三角形、一辺は扁平一辺は急角度で背面に接して刃が付けられている。調製法は尖頭器と同様な剝離が施され一見尖頭器と誤り易いものである。

以上発掘の概況を記し報告とします。